

審査員特別賞

ひとりの人間として向き合う

新潟県立長岡高等学校 2年

渡辺 晴海

私がアメリカに留学した 2016 年は、米大統領選挙の年だった。難民・移民問題、経済格差、テロリズムなど、メディアではアメリカや世界で起きている問題が盛んに取り上げられていた。ホストファミリーや同級生がそれらに関して議論するのを聞いたり、度々行われたデモ行進の様子をテレビで目にしたりして、アメリカ社会が大きく揺れていることを肌で感じた。

そんな中、私はラウィアと出会った。彼女はパレスチナからの留学生で、お茶目で話好きな 16 才だった。私たちは、同じ家庭にお世話になることになった。ラウィアと私はすぐ仲良くなった。彼女はイスラム教について沢山のことを教えてくれた。女性はあくまで自分の信仰心に応じて肌を隠すのであって、ラウィア自身、ヒジャブの着用を強制されたことはないということ、彼女の親友の何人かはキリスト教徒であることなどだ。私がそれまで抱いていた「イスラム教」に対するイメージは、ことごとく覆されることとなった。また、クリスマスにイスラム教徒がキリスト教徒に「メリークリスマス」と声をかけたり、逆にラマダーンの時期にキリスト教徒がイスラム教徒にパンをプレゼントしたりする交流があることも知った。私はそれまで、キリスト教とイスラム教は対立しているとばかり思っていたが、両者が互いに尊重しあい、共生している場所もあることを知り、ただ驚かされた。

留学生活が始まって 3 週間が経ったある日、ラウィアが学校に行かなくなった。

「テロリスト。」

同級生からかけられたこの言葉が原因だった。「怖くて学校に行けない。」と、泣いていた彼女の姿は今でも脳裏に焼き付いている。結局、彼女はそのまま転校してしまった。私は、ラウィアと同級生はなぜこのような酷い仕打ちをしたのだろう、と、憤りで一杯になった。と同時に、自分も、心のどこかでイスラム教について一方的に決めつけていたのではないか、という疑念のようなものが生まれた。実際、ラウィアに会うまでは上手くやっていたか不安に思ったし、「テロ」のニュースが思い浮かんでしまったのも事実だ。差別とは無縁だと思っていた自分が、無意識のうちにラウィアに対して偏見の目を向けていたことに気づき、はっとした。もし、日本でテロが頻発していて、テロリズムが自分や家族の命に直接関わる問題だったなら、私もあの同級生と同じことをしたかもしれないのだ。そう思うと寒気がした。差別は常に自分の足元にあるのだと、痛感した出来事だった。

また、私自身も、偏見を受けているのではないかと感じることもあった。仲良くなった何人かの同級生に、「ルミは猫や犬を食べるの？」と真剣に聞かれた。また、ある日には、「昨日、トイレで吐いてしまったのはルミ？」と聞かれた。どちらも悪気のない質問で、私は笑い飛ばしたが、内心疎外感を受け傷ついた。私の文化に対する先入観や、私を「異質な人」と見なす心を持たず、

私自身を見てほしい、と心の底から思った。今思えば、ラウィアも同じことを思っていたのかもしれない。

異文化の本質を分かろうとするとき、相手を「異文化の一部」と見なすではなく、ひとりの人間として正面から向き合わなければいけないと、痛いほど思う。また異文化のみならず、「外国」と呼ばれているものを、「ひとりの人間」の集合体と見るとき、世界はぐっと近くなるのではないだろうか。そのことを教えてくれたラウィアやアメリカでの出会いには、今心から感謝している。異文化や国境にとらわれず、世界を「ひとりひとり」の視線で見たとき、世界中で起きている問題は他人事でなくなるはずだ。

帰国した今、私には難民支援団体で働くという夢がある。難民ひとりひとりと人として向き合い、彼らの日常を少しでも取り戻す手助けをしたい、と強く思っている。